

の後又原稿を新たにしたため、再び先生の許に送って、御指導をお願いしました。処が又驚いたのでした。何となればその原稿は真赤にすぎ間もない程に筆をいれられてありました。これを大阪で開かれた全国保育大会に初めて発表しましたが、その時先生が私の後で、しっかりやれとニコニコ笑って目で示して下さった事は、勇氣百倍してほんとうに力強く嬉しかったのでした。非常な拍手であった事は前述のように、二カ年更に研究させて下さった事が、私の研究に光彩を添えていただけたので、「子を想えばこそ、親なればこそ」とこのうれしさは今も尙忘れられなく、紙製作の研究に余念ない私は過ぎし昔にかかる先生の慈父としての御教訓があった事を感謝しています。

#### 一、紙製作と紙について

紙製作の研究をするには、「日本紙」と「洋紙」について考察すると共に、紙のいろいろの性質がある事を知っておく事が大切だと、東京のはいばらという紙屋を紹介していただいたので一日中、同店で紙の種類を調べてかえった事があり、それ以来、日本紙と洋紙の長所短所について調べ、それに伴う紙の性質も、どうやら知る事が出来たのです。このように一つのささやかな研究にたいしても、こまやかな、御親切なありがたい御指導を下さいました。

#### 一、私の幼稚園経営に金言を

「林さん、あなたは一生借金袋を大黒様のように背負って行きなさい。借金袋を背負っている間は、進歩し向上して行きますよ」と、激励して下さいました。おかげ様で戦災に会い全焼した私の幼稚園は、先生がお示し下さったこの精神をしっかりと脳裡に刻んで来たので、大きな明るい気持ちで現在の幼稚園の建設が出来た事を感謝して居ます。先生の御教をお護りとも宝ともして永く私の心に記録し、益々幼児の教育に励げむ事をお誓いして、故倉橋惣三先生の御霊を御なぐさめたいと思つて居ります。

(静岡桜花幼稚園長)

## 倉橋先生の思い出

平井信義

初めて先生にお目にかかったのは、大学の三年のとき、岡部先生の幼児教育の演習に参加して、「天才論」などいう大

それた題目に手をつけ始めていた頃、昭和十五年であった。五月の下旬だつたと思う、太陽の光がさんさんと銀杏の葉に降り注いでいる午前に、岡部先生や友人と共に女高師の門をくぐった。暗い主事室に入ると、間もなく、眼鏡越しに微笑をたたえた倉橋先生の顔があらわれた。口先をとがらせたようなその口から、「やあ、いらっしやい」と気軽に言われ、みな心の寛ぎを与えたようであつたが、そのあとから「みんなが、子供を研究する積りでここにやってきたのなら帰ってもらおう。子供の研究は子供とよく遊ぶことから始まるのだから」というお言葉。

「帰ってもらおう」という響きが、私どもの胸にコツンと当るものがあつた、殊に研究心を漲らせていた私には、その言葉が更に何回も響き返ってきた。倉橋先生が幼児教育に対して當日頃言われることだと岡部先生から伺つても、それが私には納得できず、「アカデミズムに対する先生の反撥ではないか」と友人に洩らしたりした。そして半日子供たちの遊戯を見て帰った後も、天才論について相変らずあの本この本と読み漁っていた。

女高師の後身お茶の水女子大学に私を推薦されたのは、倉橋・齋藤（文雄）両先生であつた。その頃私には女の学校の先生になり切ろうなどとは少しも考えていなかったのだが、その席で倉橋先生は「君のような人は、だんだん学校の方に

移るんでしような」と笑つて言われた。私にはそんな気持が更になく、先生の一人楽しそうな笑いにつられて微笑し返したにすぎなかつた。昭和廿三年のことであつた。

しかし、その後間もなく私には倉橋先生のお言葉が蘇つてきた。愛育研究所で、子供と終日遊ぶ日が多くなるにつれて益々倉橋先生の古い言葉が忘れられないものになつてきた。そして「子供の研究は、子供とよく遊ぶことから」は、間もなく私のモットーともなり、研究はさておき遂に十年間子供と遊び暮してしまつた。いよいよこれから私の本当の研究を始める時が来た。というのが近頃の私の気持である。

「子供とよく遊べ」という言葉はその後も沢山の教育者たちの口を通じて聞いた。しかし、倉橋先生のあの口元から出て来た言葉でない、何だかどつてつけたようにきこえてしまふ。それをききながら、いつも倉橋先生の顔を思い出してしまふ。

先生のお宅へ上るようになって、二階でお話し合つた楽しさを忘れることが出来ない。偉い先生の前へでると、つい固くなつてしまふ私であつたが、急な階段を上つて椅子のおいてあるあの室に入っていくと、不思議とその気持がほどけてしまふ。何でも言えるような気がしてしまふ。いつだったか何のことだったかも忘れたが、先生にむかつて「先生の御意見は違ふ」と大声で喰つてかかつたこともあつた。そんなこ

とをいったあと、いつもなら帰り道でそれが思い返されて頭の中にしこりとして残るのだが、倉橋先生と「けんか」したあとは、かえっていい気持なのである。実際は「けんか」にもならないことだったのだが、帰宅するとよく、「今日は先生とけんかしてきたよ」と家内に冗談を言ったりした。

二、三回お邪魔をしている中に、先生の高弟になったような気持に溺れてしまった。月々に一回、先生を囲んでもっと若い学生も混えて放談会をしようと津守君と計画したこともあった。しかし、間もなく先生が耳を悪くされて、それが果せなかったのは、今以って残念でならない。その間にいつか私は女子教育に大きな興味を持つようになっていた。

なお私の耳に残っているのは、先生の高い調子の声である。一と頃、雑誌「幼児の教育」のことで、先生からしばしばお電話をいただいた。そんなとき、普段の冗談を混えた話し振りとちがって非常に丁寧であって、受話機を持ったまま私は非常に恐縮した。その先生の声が、今もなお「ああ、平井さんですか」と耳元に呼びかけてくる。

(お茶の水女子大助教授)

## 倉橋さんを思う

藤本 萬治

倉橋さんは、明治三十九年七月、東京帝国大学哲学科(心理学専攻)を卒業されました。私はその年の九月に、同じ哲学科(教育学専攻)に入学したので、学生時代には、倉橋さんを知りませんでした。倉橋さんを知ったのは、倉橋さんが東京女子高等師範学校の教授で、文部省の教授要目改正の委員になられた頃で、私は当時文部省図書館に勤めていて、要目改正に関係していましたので、その時分からよく知り合ったように記憶しております。

昭和二十年二月、私は東京女高師の校長に就任してから、倉橋さんと毎日顔を合せるようになり、親しく交際する機会を得ました。しかし、戦争が苛烈となってきた、勤労動員で学生は学窓から引離され各地に分散して勤労に従ひ、附属高